

綏山河

創刊号

昭和63年4月25日

発行

社団法人 沼津牧水会

目次

ごあいさつ 林 茂樹 1

—開館によせて—

幸せのひと 若山旅人 3

祝 辞 高森文夫 4

牧水記念館によせて

大河原二郎 6

「牧水祭」事始めについて

佐藤茂正 7

覚え書きから

寺田桂子 9

年古りて 大林永一 10

開館記念式典 14

開館記念イベント 17

後記

ごあいさつ

林 茂樹



今ここに沼津市若山牧水記念館開館記念式典に臨み、本記念館建設に至る経緯を振り返り、正に感慨無量でございます。

歌人若山牧水は、大正九年八月に東京を離れ、一家を挙げて沼津に移住してまいりました。千本松原の景観に魅せられて永住を決意し、大正十四年には松原の一角に住宅を新築しています。その間、詩歌の総合雑誌「詩歌時代」を創刊するなど活発に文学活動を展開する傍ら、松原伐採に反対する市民の先頭に立つたこともあります。終熄に至るまでの八年間は、「牧水の沼津時代」といわれており、調べの美しい数々の短歌、叙情溢れる紀行文など、牧水ならではの文学を確立し、近世の歌壇にめざましい足跡を残しております。

牧水の没後、牧水を顕彰する会が組織され、千本松原に最初の歌碑が建立されましたが、沼津と牧水との関わりを地域の文化関

係者が特に重く見るようになったのは戦後まもない頃からです。「沼津牧水会」が主催して牧水歌碑の前で毎年行う秋の碑前祭と短歌大会の催しは、今年が第三十四回に当たります。市内外からの声援や各界の強い協賛を得るなかで、今では沼津の秋の風物詩として、伝統的な行事になっております。

「沼津に牧水記念館を」という声は、牧水祭に集う人々を中心に、郷土を愛する市民の声として、どこからともなく上がり、次第に広がってまいりました。昭和五十四年頃からにわかにその気運が高まり、五十六年五月、沼津牧水会が音頭をとり「沼津牧水記念館建設発起人会」が結成されました。各界二百六十名余の発起人によって組織され、同年十月一日を期して募金活動がスタートしました。

発起人一人ひとりの献身的な取り組みと、賛同する人々の熱意のおかげで、善意の寄付金は次々と沼津市へ採納されました。五十八年に入ってからには、有志の方々によって、パステル画、日本

画、洋画、書など各種のチャリティ展が相次いで開催され、そのつど話題を提供し、それらはすべて記念館建設を促進する強い説得力となりました。五十九年には、発起人会の代表が、地元各自治会、PTAと共に、市長並びに市議会議長を訪ね、牧水記念館早期建設の請願もいたしました。

こうして六十一年度末までには総額六千万円が沼津市に納められる見通しとなり、これを基に一億二千万円の建設費が六十一年度予算に計上され、建設予定地も景勝絶佳の千本郷林の地に確定し、六十一年九月二十五日ようやく工事が始まりました。

本年三月、記念館は見事に完成し、沼津文化の新しい大いなる拠点の誕生は、正しく現実のものとなったのです。

展示資料の収集に当たっては、若山旅人、大悟法利雄、鈴木俊一、高橋希人、竹沢正夫の各氏、宮崎県東郷町の牧水顕彰会をはじめ多くの人々から多大のご協力を得、また、展示作業も大悟法利雄氏の構想を基にこの程完了、ここに開館の日を迎えることができました。

記念館の運営については、沼津牧水会と沼津牧水記念館建設発起人会を発展的に解消して設立された「社団法人沼津牧水会」が、沼津市から委託され、携わってまいります。記念館の運営を通して、教育文化の振興に寄与するのみならず、地域社会活性化の役

割を幾らかでも果たすことができたらと思っております。今後一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

そして、この運動を支援して下さった多くの方々、各種文化団体、地元自治会、PTAの皆様、また、牧水記念館建設に踏み切られた沼津市当局並びに沼津市議会に対し、心から厚く厚く御礼申し上げます。

また、かねてからの懸案でありました会報「幾山河」の第一号を、皆様にお届け出来るはこびとなりました。たどたどしい歩みだしではありますが、いささかのきずなどもなれば、との所存でございます。なにかとお気づきの点などお教え下さいますよう併せて御協力の程お願い申し上げます。

昭和六十二年十一月一日

(社団法人沼津牧水会理事長)

開館によせて



幸せのひと

若山 旅人

牧水の風貌は人前を飾らぬ素朴で地味なものでしたから、初めて逢う人にはまず田舎のお爺さんの様にも思われたことでしょう。けれどもそれが別れる時には、あたたかく包まれた思いで辞して行つたそうですから、それはやはり人柄というより仕方ないと思います。従つてそれは作品にも自然に現われて、多くの人に記憶されて残ることになりました。

「幾山河」とか「しら玉の」とかいう有名な歌のほかにも、次のようなまろく優しく哀しい歌は幾つも拾い出すことが出来ます。

鉄瓶のふちに枕しねむたげに徳利かたむくいざわれも寝む

飲む湯にも焚火のけむり匂ひたる山家の冬の夕餉なりけり

わが行くは山の窪なるひとつ路冬日ひかりて氷りたるみち

澄みとほる冬の日ざしの光りあまねくわれのこころも光れとぞ射す

ありがたや今日満つる月と知らざりしこの大き月海にのぼれり

日をひと日富士をまともに仰ぎ来て今宵を泊る野の中の村

このような歌を作りながら、僅か四十三歳で生涯を閉じたとはいえ、自分の思うままに天地自然の息吹きにひたれた人生は、後世の人に世俗を離れた羨望と憧れのようなものを感じさせるのではないのでしょうか。

世界中には遺業を偲んで建てられた記念館は数知れずありますが、その中で私の記憶に



強く残っているのは、デンマークのアンデルセンの記念館です。オーデンセの街角にひっそりと瓦葺漆喰塗りの平屋建てで残っています。考えて見ればアンデルセンも牧水と同じく業を誇らぬまま質素に、天から与えられた啓示の中に生きた人でした。

このたびは沼津牧水会の提唱に沼津市が賛与されて、美しい記念館をお建て下されたことに、遺族として心からお禮を申し上げずにはいられません。

生きていてこの企てを聞いたならばおそらく牧水は平身低頭して固辞したことでしょう。

今千本浜に建っている歌碑ですら生前の固辞がもとで、没後忽ち翌年に第一号として出現し、今は全国に百三十を超える数となりましたのが実情の姿です。

この記念館の明るさは全く生前の牧水そのままを継いでおります。誕生地と終焉地の二ヶ所に後世の皆様によって記念館が姿を現わし、全く牧水は幸せの人と思うのです。

(牧水長男・「創作社」主幹)

祝 辞

高 森 文 夫

このたび、沼津市の皆さんがたのご熱意により、すばらしい沼津牧水記念館が完成されましたことをお祝い申しあげるとともに深甚なる敬意を表したいと存じます。また、この記念すべき年に、会報が発行されることとなり、その創刊号に小生の祝辞を述べさせて戴く機会を与えて戴きましたことに深く感謝いたします。

清新で、叙情性豊かな牧水の歌は、日本人の心をとらえ、多くの人々に愛唱され続けて

いますが、当地におきましても、一昨年の生誕百年祭を期に、わが国の近代文学に大きな足跡をのこした郷土の先覚者を顕彰しようという気運が一段と高まっているところでございます。

「幼き日ふるさとの山に睡みたる細溪川の忘れぬかも」

牧水が幼少時代を郷里坪谷の豊かな自然の中に過ごし、その故郷を、生涯を通じて歌い続け、晩年において沼津の自然の美に魅かれて、永住の地と定めたことを想う時、その因縁の浅からぬものを感じるのであります。

牧水生誕の地東郷、終焉の地沼津とが、この深いご縁によって、従来からご交誼を戴いているところでございますが、まことに嬉しい限りでございます。

さて、このたびの沼津牧水記念館の開設は、東日本における牧水文学の殿堂として、大きな期待が寄せられるものと存じますが、西日本の坪谷の記念館ともどもに、連携をとらせて戴き、姉妹館としての交流がはかれるならば、牧水の顕彰事業は、なお一層充実発展するものと考え次第でございます。

なお、現在、東郷町におきましては、町の活性化をはかるために、諸施策を企画しているところでありますが、とくに「郷愁をそそる牧水のふるさと東郷」をキャッチフレーズに、全町あげてその町づくりにとりくんでいるところであります。どうぞ、沼津の皆さん方にも、東郷町に足を運んで戴き、文化の振興は勿論、各方面にわたるご助言を戴けるならば幸甚に存ずる次第でございます。

最後に沼津牧水会のみましますのご発展と、関係の皆さん方のご健勝をお祈りしましてお祝いのことばいたします。

(宮崎県東郷町長)

牧水記念館によせて

大河原 二郎



「千本をよくする会」の会長木村さんの下に七人の侍がいた。よく飲み、よく食べ、またよく遊んだものである。その中の一人に田中温古堂がいた。私が沼津ロータリークラブに入会して間もない頃のことである。彼は商売柄牧水のことについて詳しく、酔うと屢々牧水調の朗詠を披露した。

昭和四十年の秋であったと記憶するが、ある日彼は私を牧水の碑前祭に誘った。私はもともと文芸には縁がなく、まして短歌には全く無縁であったが、牧水が大酒飲みであったこと位は知っていた。以来、温古堂のお手伝いを別段するわけではなかったが、毎年、の碑前祭には暇さえあれば出掛けて、仲間といっしょに飲む破目となった。

牧水が千本松原に魅せられ一家を挙げて沼津に移住して来たこと、牧水が県の千本松原伐採計画に反対して松原を守る市民運動の先頭に立ったこと、牧水がこの地に永眠するまでの「牧水の沼津時代」と呼ばれる輝かしい八年間の文壇上の業績のことなどについては、その多くを私は酒席において聞かされたのであった。

この不世出の歌人若山牧水は、接する人を魅了しておかないところがあつたらしく、沼津には牧水を敬愛する人々が非常に多い。従つて、千本松原を守ってくれた恩人でもあり、沼津市の文化事業の一環ともなりうるので、牧水を顕彰すべく千本松原に記念館を建設したいという案の起こつたのは全く自然の成り行きであつた。勿論中心となつたのは碑前祭を育てられた乗運寺住職や田中温古堂、そして牧水会の方々であろう。

募金は三年計画であった。しかし、経済事情の激動のこともあって、実際ここまで漕ぎ

つけるには五年を要した。六千万円の金額は民間の文化事業の募金としては瞠目に価する。

そして、その成果が理想的な形の牧水記念館としてここに実現したことは実に喜ばしい。

私は、先に述べた如く詩歌とは全く無縁の者ではあるが、偶然の機会から委員の末席を汚した者として肩の荷の下りた思いである。

記念館の運営は新しく発足した社団法人沼津牧水会に市より委託された。今後、沼津市の誇る教育文化活動の一端を担って広く市民に利用されることを願っている。

(社団法人沼津牧水会副理事長・牛臥病院名誉院長)

「牧水祭」事始めについて 佐藤 茂正



昭和二十九年発行の沼津歌人（改題東海短歌）の七、八月合併号の編集後記に、第一回牧水祭のことが書かれた部分がある。内容に少し触れると、——「期日、九月十二日」「場所、公会堂」。講師は若山喜志子、長谷川銀作、大悟法利雄氏。また評論的な立場から土岐善磨、小田切秀雄氏の何れか、などが予定（未定）として紹介されている。

この第一回牧水祭については、沼津歌人誌上に記録の記載がない、ただ同年九月号の誌上で「牧水の選挙応援演説」渡辺順三氏及その他の文章で特集を組んでいるが、同年十月号で杉山重義氏が「九月号評にかえて」の中で、若山喜志子氏の牧水祭短歌会選評に触れた部分があるだけである。

昭和三十三年に沼津牧水顕彰会が発行した小冊子「人間牧水を語る」の後記の中で、故積惟勝氏が牧水祭の事始めについて書いている部分があるが、これらの事については、数少ない記録と記憶の散逸しないうちに、議事録的にでも纏めておかななくてはならない仕事かもしれない。

現在の様な形に沼津牧水祭が定着したのが何時の頃だったか、この稿を書き始めた時点では調べる時間もなかったが、牧水祭へ主として短歌大会の記録については、第二回以後、稍正確に沼津歌人へ昭和三十年三月号以後は東海短歌に記録されている筈である。因みに第二回の「牧水祭」の記録をみると、運営委員として次の諸氏の名前がある。

長倉宣一、田中要吉、高島友次郎、村上真、伊藤祐輔、長谷川茂正、芹沢初子、久田二郎、杉山重義、大井田隆、四方一瀨、蓬田八重子、杉山芳春、谷内芳子、佐々木青史、山城裏、葉山宣淳、杉山幸作、内田欣作、井手けい子、積惟勝の諸氏、合計二十一名となっている。

このように、牧水祭の創生期に参画した人々や、そのあと数十年に及び手弁当で今日まで、沼津牧水会と牧水祭を支えて来た多くの人達の善意と、具体的史実の積上げを果たしてきた事に対し、今後沼津牧水会が続く限り、その事は記憶されていかなければならない事と考えている。

今回、沼津市若山牧水記念館が誕生し、併せて社団法人沼津牧水会が発足したが、こと今日に及ぶまでの、牧水会会長林茂樹氏と、事務局長上田治史氏、また故田中旭氏等の御苦勞と献身に対し、心より敬意を表したいと思うのである。

（社団法人沼津牧水会副理事長・「東海短歌」主幹）

覚え書きから

寺田 桂子



年をとると事柄の記憶は感情の残像として残るということだが、もともと情緒的な人間である私には記録書でも見ない限り正確な記憶と云えるものはなくて、すべて心象的な残像として事実は有るようである。手許に残した唯一の記録書らしいものと云えば、記念館建設募金賞書と自分で名付けた赤い皮表紙の一冊の私記だけで、それとてもまことに恣意的で公憤、私憤いり交じりとても公表できるものではないのだが、年月を経たいま読み返すとそれなりにドキュメンタリーで、私自身の心臓の鼓動だけは鮮やかに再現してくれる。ノートは昭和五十五年七月二十二日(火)晴午後六時於千本乗運寺、牧水記念館設立準備会の記録で始まっているが、その一項目に自らを鼓舞するためのような巻頭言らしきものを書いているので、発足当時をなつかしみ書き写してみる。若山牧水の記念館を作ろうではないかという発想は大分以前からあったようである。何故実現しなかったかについては詳らかではないが、漸くそれが表面化してきたのは、牧水高弟大悟法利雄氏が高齢となられ、ご所持の牧水の遺墨の処置、保存について真剣に考えられているようになったからのようである。記念館が出来ればその殆んどをご寄附下さるといふ。沼津は牧水終焉の地であり、千本の乗運寺は墓処である。沼津より他に最適の地はない。前市長庄司辰雄氏は強力にその設立を希望しておられ、機会ある毎にその旨の発言をされている。まさに機は熟したといふべきか。乗運寺御住持林茂樹師を会長に戴く沼津牧水会としては奮起せざるをえない。庶民にとっては気の遠くなるような莫大な募金計画である。千本の緑の中の優麗な



建造物をまなうらに悲愴にも歩み出でんとする、わが沼津牧水会」というのである。いさ
さか活弁調のこの文章は意気さかんというより多分にやけ気味な当時の私の気分をみせて
いて、区画整理による墓地改葬という大事業を抱えられていた林会長、その頃もうお体の
不調を自覚されていたのか腕を拱き黙然と坐っておられるようになった故田中旭氏、工場
の改築を計画中であられた上田治史氏、もう若くはない私たち、前途は不安に溢れてこの
決断に至るまでの容易でなかった思惑の日々を想起させてくれる。そしてそれが長く困難
な、苦渋と忍耐に充ちた林会長の募金活動につながって行った事を思うと感無量という他
はない。

(社団法人沼津牧水会理事・歌人)

年古りて

大林 永一

年古りて思ふこと多きこの頃なのに、記憶は日々に薄れてゆく。年譜を残すほどの私の
人生では無いが、何がしか書き残して置きたいといふのも亦、世の常人の風懐であらう。

もう六十五年も前のこと。

旧制沼津中学校三年生の頃、「車前草」という同人雑誌を、二三の友人と相謀って創刊し
た。大正十四年三月二十三日付の千本浜若山牧水と署名のある激励の手紙を、いかに驚倒
せんばかりの感激で私を読んだか、当時高名だった牧水が、一介の少年に対する、考へら
れない程の恩情であった事に、今考へても胸の痛くなる話なのに、その当時は自分の才能

に自信を持ち始めた頃で、只有名な牧水の手紙を持つてゐるといふ一種の自負のやうなもので満足してゐたらしい。生意気千萬な文学少年であつたわけだ。

三号雑誌といふ言葉が流行する程だつた同人雑誌は殆ど三号でつぶれたが「車前草」も、その通りにつぶれて廃刊した。

この事は、その後露木豊君が編集長をしてゐた頃の沼津朝日新聞にも、若山牧水記念号の「沼津史談」にも、掲載したので、重複を避けて、これからの本段へ入る前の前段として理解してほしい。

遊びにおいでといふ牧水の誘ひの手紙を信じて、家を訪問したのは前後二度だつたと憶えてゐる。

「創作」誌上の歌会案内を見て、新築らしい千本の借家での歌会へ出席したのは、大正十四年の初夏のよく晴れた日だつた。桃畑の中の二階家で、見晴しのよい気持ののびやかな裡に、歌会は進行していった。出席者は三十名位。牧水は欠席で、喜志子夫人が顔を見せてゐた。この時は大悟法利雄さんも欠席だつたらしい。牧水に会ひたくて出席した私は、何となくつまらない気持で終始してゐたのをいつまでも憶えてゐた。

パラソルの澄みたる影の往きつ来つ明るかりけり五月の町は

喜志子

この歌を六十年余経つた今でもまだ記憶してゐるのは不思議だが、牧水の夫人だつたばかりでなく、歌人としても有名な人が、歌会とはいへ、この程度のものかといふ気持があつた。それには私の出歌の（馬鈴薯の花白く咲くこの道は山に向かへり初夏はなつに入る）の批評その他が、あまりよくなかつた為の、やや憤慨の気持の後に発表された選者咏だつたせゐるかもしれない。批評といふのは初夏といふ生硬の文字は使ふべきではない、四句と五句

は入れ換へるべきだ等々であった。私はその時、五句をそのまま据ゑおかなければ、四辺の景観が全体として、夏に入る感じが少ない、そこが詩といふものだと、ムキになって主張した。夫人は笑つてゐて口出しされなかつたやうに思ふ。

それまで原田浜人先生の関係から、句会にはよく出ていたので、歌会はずまらないものだと思へて、その後は出席することはなかつた。

大正といふ、考へやうによつては一種、へんな時代、前の明治と後の昭和といふ時代の僅か十三年間あまりの年代。今考へても懐かしい自由なりベラリズムの時代が、夫々に独立して存在を主張してゐる、この妙な百年間の日本といふものを、世の歴史学者はどう定義づけやうとするのか、面白いだけでなく、なかなか至難な問題であると思ふ。

この大正時代の五年間を中学生として過した少年達、その沼中の同窓会名簿で文学的に目についた人々を拾つて見るとなんと大勢居るではないか！①北川三郎、②芹沢光治良、③布川角左衛門、④落合京太郎、⑤大岡博、⑥騎西一夫、⑦井上靖、⑧金井広、⑨小山武夫等々。本気で探せば未だ大勢居ることと思ふ。

その大正が十五年十二月二十五日で終り、その後すぐ昭和二年に入り、もの凄い大不況の結果、全国の銀行の倒産数何百といふ大変な時代に突入するのである。

夕影の町の空気のどよみつゝ霰ゆたかに降りいでにけり

右は博文館発行の「中学世界」といふ当時のピカ一雑誌の十二月号の和歌欄一席に、牧水が採つた一首である。一等賞金拾円は十六才当時の私にとって、歓喜であるばかりでなく、半年前の歌会の不名誉や不愉快を吹き飛ばしてくれたのである。やはり牧水先生だ！と感激したのは当然だが、少年の単純な純粹無垢な気持を表明したくて、私は新築成つた

牧水の家を訪ねた。

もう十二月の夕暮に近い玄関にただ佇立してゐる私に、牧水先生はお留守ですと膝をついて告げたのは、多分大悟法利雄さんだっただらうと思ふ。これはその後ずつと経つてから悟ったことであつた。(63・2・20)

○

- ① H G ウェルズ (世界文化史体系) の譯者。
② 作家として高名。③ 筑摩書房顧問、岩波書店社友等。④ アララギ編集、本名鈴木忠一。
⑤ 窪田空穂の高弟、歌人、大岡信の父 ⑥ 本名松本一三、(改造) の懸賞小説に「天理教」当選、作家として囑望されたが、共産党に入り、新聞アカハタの編集長、以来筆を断つ。
⑦ 作家としてあまりにも有名。⑧ 詩人、富士で医院開業。⑨ 中日新聞相談役、中日ドラゴンズオーナー。

(社団法人沼津牧水会理事)

開館記念式典



昭和六十二年十一月一日・沼津市若山牧水記念館開館の日は、爽秋のまさに日本晴れであった。真新しい木の香の匂う記念館は、若山牧水ゆかりの千本松原の地続き、駿河湾に面した二千四百平方米の敷地に、鉄筋構造、漆喰塗り純白の壁面に、銅板葺き奇棟の屋根がくつきりした静謐優雅な建物であった。広い芝生に松やとべらを配した明るい日本式庭園は瀟洒なたたずまいである。



ゆるやかな上り勾配のアプローチを行くと、玄関に張られた紅白のテープが目についた。テープカットは、沼津市長渡辺朗氏（代理金沢助役）、市議会議長西山次雄氏、市教育委員長荒木陽子氏、若山牧水記念館館長大悟法利雄氏、社団法人沼津牧水会理事長林茂樹氏によって行われた。その瞬間、報道陣はじめ、人々のかまえたカメラのシャッターが響いた。



正面のガラスの扉が開かれ、静岡県知事齋藤滋与史氏、県教育長芝健氏、宮崎県東郷町教育長渡辺邦彦氏等がまず入場し、続いて招待客など来会者が次々と入場着席した。



開館記念式典は、午前十時、沼津市長の式辞に始まり、建設経過報告に続いて、沼津市長より沼津牧水記念館建設発起人会並びに(株)稲田建築設計事務所、大東建設工業株式会社にそれぞれ感謝状が贈呈された。



祝辞は、静岡県知事、沼津市議会議員、若山旅人氏からのべられた。来賓紹介のあと、社団法人沼津牧水会理事長の挨拶があり、いよいよ感激の拍手のうちに沼津市長より大悟法利雄館長へ、記念館の鍵の引き渡しが行われ、それによって式典は閉式となった。



式典が行われたラウンジは二面が総ガラスで、晴れた日には富士がよく見えて
 明るい。

玄関の左側は、会議・小集会に使用される閑雅な和室である。
 ラウンジ隣接の展示室には、生前、牧水が日常愛用した硯と墨、印刻、表札、
 作歌ノート、日記、書簡等も陳列され、歌人若山牧水の輝かしい軌跡が豊富な資
 料を一堂に集めて展示されている。復元書斎の細部には長子旅人氏の幼児の記憶
 が反映されて、しみじみと牧水を偲ぶことができる。



同日十二時から、記念館開館記念式典をかねた第三十四回
 沼津牧水祭の碑前祭と芝酒盛が例年にも増して盛大に催され
 た。碑前祭式典は開会林茂樹氏、挨拶を沼津市教育長桑原良
 文氏、献酒献花若山旅人氏、来賓祝辞県教育長芝健氏、東郷
 町教育長渡辺邦彦氏、合唱「幾山河」ほかを沼津合唱団、閉
 会大河原二郎氏、司会上田治史氏。

芝酒盛は、名物おでんに地酒「牧水」、甘酒茶屋にお茶席。
 沼津太鼓育成保存会の沼津太鼓「アカペラでうたうにほんの
 うた」のコーラス、花柳稔社中の「牧水を舞う」など、にぎ
 やかにしみじみと楽しい秋の一日であった。

第34回 沼津牧水祭・短歌大会



62・11・15(日) AM10:00
沼津軒5Fホール

左より寺田武・山田震太郎・藤岡武雄・高嶋健一・藤田三郎の諸講師

沼津駅前沼津軒の五階大ホールは、この日県内各地から参加した約二百四十名の歌人によって稀にみる賑いを呈した。出詠四百四首の歌は予め五人の講師の選歌を集計した結果、十八首に絞られていた。本日の短歌大会は新しい短歌の場を演出すべく、パネルディスカッション形式を採用しており、各講師は「牧水賞」選定を前にして、自分の選んだ歌を中心に、それぞれ三十分ずつの講評を行なうことになっていた。講師に招聘された次の五氏はいずれも県歌人協会の常任委員で、静岡県歌壇のトップリーダーとして活躍する人達である。

高嶋健一（「水麴」編集委員長、県歌人協会会長代行） 寺田武（「国民文学」所属） 藤岡武雄（「あるこ」主宰） 藤田三郎（「形成」所属、県歌人協会事務局長） 山田震太郎（「未来」所属、「浜松歌人」主宰）

高嶋氏は先ず今年の短歌的状况について所見を述べたあと、一位に推した「暗黒のロダンの胸を逃れたるカミュー・クロードルやがて狂ひき」に触れ、この歌に見られる、芸術家のもつ狂気とも言うべきものと、人間としての傷ましき、それらを超える文学のありようを問ひかけ、高い調べで歌いあげた点を評価した。寺田氏は短歌における声調の重要さについて言及したあと、一位に挙げた「若き医師の人工呼吸の指のあと窪める終の襟元合わす」について批評した。

藤岡氏は「黒き月しかと抱きて太陽の金環ゆらり中空に浮く」を推し、藤田氏は「亡き夫の退職記念のカメラ持ち夫踏まざりし地に来て写す」を挙げた。また山田氏は明石海人の歌をはじめて読んだ時の感動を述べたあと、一位に「ありがとう」と小さな声で言う母のたて膝をした足の爪切るを推挙した。休憩のあと、上田治史氏の司会で「牧水賞」選考のためのかなり厳しい論議が交わされた。五人の講師の独自の意見が入り乱れるなか、やがて参加者の拍手なども出たりして、結局次のように入賞作品六首を選出した。

牧水賞、受賞作品

町工場に錆物を削るわが夫の煤けし顔が角曲り来る (焼津市) 石田 宮子
暗黒のロダンの胸を逃れたるカミュー・クロードルやがて狂ひき (沼津市) 上田 治史
涌水に芹摘み居れば沢蟹の赤きが花のごとく揺れをり (御殿場市) 長田多津恵
ペルシャ湾を航き航きて子が見るといふ星に双眼鏡の焦点合わす (新居町) 水谷 洋子
疎開して伊豆のまほらに田をおこし共に長寿の「ワッペン」もらう (函南町) 天田まさよ
若き医師の人工呼吸の指のあと窪める終の襟元合わす (焼津市) 加藤りん子

第1回 文芸講演 <沼津の文学風土> 山本三朗



62・12・9(水)
PM 6:00
記念館ラウンジ

山本三朗氏は内浦保育園の園長だが、沼津市歴史民俗資料館の運営協議会々長や人権擁護委員など、広範囲の重要な役職についており、地方行政になくはならぬ活動的な知識人である。今日の講演は先ず毎日新聞掲載の「牧水記念館建設によせて」という記事の引用から始まった。開館記念式典のあいさつの中で、林牧水会理事長が募金活動に走り回った当時は回想、思わず声をつまらせたという情景を伝え、その「心血を注いだ建設の労苦を」をねぎらった。同時に「明治史料館に巨額を投じたことに比べ、牧水記念館の対応は納得しかねる」という要旨を強調、今後の理解をうながした。

話の中心はおおむね沼津内浦地区についての歴史的、民俗学的展開に絞られていった。内浦長浜にある白髭神社敷地内の出土品は、紀元三世紀のもので、近く県の指定文化財に認定されるという話があった。三津の喜多神社の祭器が千百年前、菅原道真によつて作られたかもしれないという説にも、正に民族的浪漫的な興奮が感じられた。

氏の実に入念で緻密な考証は、視点を明日香、奈良時代まで遡り、今も内浦地区に残る「腰掛け」「忌中部屋」の慣習が昔の韓国に直結している事実を挙げるなど、聴衆を一気に古代幻想の世界に誘い込んだのである。

第2回 文芸講演・対談 <牧水夕暮時代> 高嶋健一・上田治史



高嶋健一(右)と上田治史の両氏

63・1・27(水) PM 6:00
記念館ラウンジ



高嶋さんの話 「斉藤茂吉は夕暮の作風について、牧水のようにしんみりした歌はあんまり作らない。不器用だと言っています、これも相当な言葉ですね、しかし、一種鋭い、深みのある底光りのする歌を詠む、とも言います。二人の内どちらがうまいかと言えば、牧水の歌の方が歌らしいでしょう。そして人口にかいしやすまる円さ、やわらかさがありますね。夕暮の方はもつとごつごつしている。或るところで人を捕らえて離さないものをもっている、それが夕暮の歌ですね」

上田さんの話 「高嶋さんのお話の中にもありましたが、当時の若手の歌人たちが「明星」に対して或る敵対意識をもった、そのことが実は明治中期の歌壇にとつて一つの起爆力でもあったんですね。仮装敵国視するその緊張感が、そのまま彼らを奮い立たせ、仲間意識を固め、新しい歌論の展開につながっていったようにみえるのですね。だから歌の方法論的差異よりも、個の情念のぶつかり合いによつて、「明星」中心の歌の世界は、この時一挙に再編成されたんじゃないでしょうか」

……この夜二人のやりとりは、談論風発して尽きる所を知らず、まだ明けやらぬ明治時代の、薄暗い混沌の世界へ聴衆を誘い込んだ。今日の話を起点にして、結局二人はもう一度向き合うことになりそうである。

開会記念コンサート 〈牧水を唄う——牧水とその仲間たち——〉

63・1・29(金) PM 6:30
沼津市民文化センター



牧水記念館の資料収集のとき、これまであまり知られていなかった、牧水の短歌や詩に曲をつけた譜面が十数曲見付かった。記念館企画室ではこの曲を開館記念に使いたくて、週辺の音楽関係の人たちに呼び掛けたところ、予想以上の多くの人の熱心な賛同の声を聞いた。この計画はその時から俄に活気を帯びたのである。あつまった人たちは、沼津、三島、清水町などの合唱団に所属している主婦や音楽教師、学生ら二十六人と、二期会などで活躍しているソリスト四人、それにピアノリスト二人。指揮は杉山一郎氏が当たった。この公演が終わったのち直ちに解散する筈の、超党派無派閥の一回限りの合唱団で、それだけでも一つの話題になった。

開幕の前、暗くなった舞台の一隅で第三歌集「別離」を解説する朗読がおこなわれ、牧水の初期歌風の成り立ちや、栄光と挫折の青春の日々が丁寧な淡々と語られた。解説が終ると静かな闇の中から、初めてコーラスの声が湧き上がるように流れ出した。ゆつくりと力強い透明な混声であった。歌詞は「天地のこころあらはにあらはれて輝けるかも富士の高嶺は」という、牧水晩年の富士山を歌った名作である。歌の途中から幕が上り、やがて合唱団の全員が明るい光のもとに姿を現わした。

続いて「牧水短歌四題」が「いつ知らず」「幾山河」「けふもまた」「白鳥は」の順で歌われ、牧水青春歌詠のもつ浪漫性の極みを表現した。休憩のあと北原白秋の「かやの木山」外を塚原田鶴子さんがソプラノで、また石川啄木の歌と牧水の詩「枯野の旅」を佐藤真澄さんがバリトンで、それぞれ格調高く歌い上げた。次の「組曲・牧水のうた」は、日向市における牧水百年祭の式典の際に一度歌われたことがあり、三年ぶりの詠唱であった。その寺原伸夫氏作曲の十首は「幾山河」や「ふるさとの尾鈴の山」など、牧水短歌ならではの独特の調べの美しい音楽空間を構成し、文化センター小ホールを埋めた四百四十人の聴衆を完全に魅了したのである。

(ソプラノ) 梅原ひとみ、大津津義、川口みはる、玉森聖子、中山有子、南條敏子、長谷川由香、福島敬子、藤原由妃、八木千賀子、メソソプラノ (アルト) 服部浩子、浅田朱美、石川悦子、石川由美子、クンツ富喜枝、鈴木嘉代子、田中恵美子、山崎明美、(テノール) 尾鷲謙、鈴木三郎、城代辰生、(バス) 市川行洋、梅原兼美、野田寿、諸星肇、吉田宏 (ソプラノ・ソロ) 塚原田鶴子、山本はるみ、(テノール・ソロ) 杉本年宏、(バリトン・ソロ) 佐藤真澄、(ピアノ) 田中祐子、久川明子、(朗読) 袴田千枝子、(指揮) 杉山一郎、(制作) 上田純也

第3回 文芸講演会〈冬の夜の歌話〉 玉城徹・高嶋健一

63・2・24(水) P M 6:00

記念館会議室



向って左より高嶋健一・玉城徹・上田治史の諸氏



玉城さんの話 「わたしのところから二駅ばかり行ったところに立川という駅がありまして、その駅ビルに蕎麦屋がある、僕はそこで玄米酒というのを飲み本なんか読んでいます。向こうに居るのがどうも東北の人らしんですな、仙台弁なんですな、どうも言葉が聞くと。そのうちおじいさんと、多分娘でしょう、四十か五十の主婦と、二十くらいのお嬢さんと三人。そしたら蕎麦を食べながら「うまい、いろずろの蕎麦だなあ」とこう言っている（笑い）更科蕎麦なんです。イロズロってのはこれはもう比喩ですよねえ「こんなイロズロの蕎麦はもう蕎麦でねえなあ」なんて言ってるんです。（笑い）そのうち多分写真を撮ろうしたんですね。机の下にかばんが置いてある。こうやってね、かばんの中を覗き込んで、何を言いかと思ったら「ナマジ、ナマジ」。これが比喩の精神ですよ。カメラが鯨に似ているなんてことはつまらない。こうやって探しているうちたんぼの中で鯨をとっているのを思い出して「ナマジ何処だ、ナマジ」なんて「居た居た」なんて言っているのを思い出して居る。（笑い）こういう風に私達の日常の言語活動の中に、これは詩でもなんでもなかったんだけど、比喩的精神ってのがあつた。これは二葉亭四迷の「俗語の精神」、この中に比喩の源泉があつて、それを詩として生かしてゆくのが詩なんです。それを忘れてやるとなんだか非常に窮屈なものになる。だから僕はさつきから言っているけれど、何もね静かな歌がいいから静かな歌だけを作りたいと言っている訳じゃないんです。やるときには相当乱暴なことをやってもよろしいと思う。何かリズムでね、こういう風に静かな歌だけがいいと言っているんじゃない。但し根本精神として相当激しいことを言っても、その奥にあるものは、一つ記号化されない自分の奥底のものを感ぜさせる、これが一つの世界との関わり方で、ここから歌が発して来ないとまずい。ただ騒ぐだけでは何も残らない。僕は歌は下手でもいいと思つていますがね。

土曜日のコンサート 〈鈴木輝男・松本平行 ギターデュオの夕べ〉



鈴木輝男さん(右)と松本平行さん

63・2・20(土) PM 6:30

記念館ラウンジ

ギターという楽器には妙にさすらいのイメージがつきまとう。どことなく牧歌的な風情があるし、聞いているとへんに寂しくなってくる。昔、小林旭が肩に背負って世間を渡り歩いた映像が、脳裏に残っているせいである。

ところがこの夜鈴木さんと松本さんのギターを聞いて、その印象は吹き飛んでしまった。松本さんが「語り」の中で「今から私の弾くのはロバート・チェロンの組曲で、そう聞いたただけで頭が痛くなる人が居ると思います、難かしいんじゃないだろうか：難しいんです」と笑ったけれど、まさにその夜の二人の演奏は、渋く古典的かつ濃厚で、心に響くものであった。

鈴木さんは初めに「ゴヤのマハ」を弾いたあと「スペインの曲は一度は通過しなければと思っています」と言い、全曲スペインのものでまとめた。特に「アルハンブラ宮殿の思い出」については「この曲は昔東高に居たころ、沼津公会堂で演奏した。若し成功したら同好会をクラブに昇格してやると言われ、そのあたりから病み付きになっていったものです」と説明した。

弾く者と聞く者がしっくり溶け合ったコンサート。このサロンのな空気、これからの沼津で最も新しい音楽のステーションになるかもしれない。

第4回 文芸講演会 〈牧水をめぐる歌壇〉 藤岡武雄



63・3・23(水)

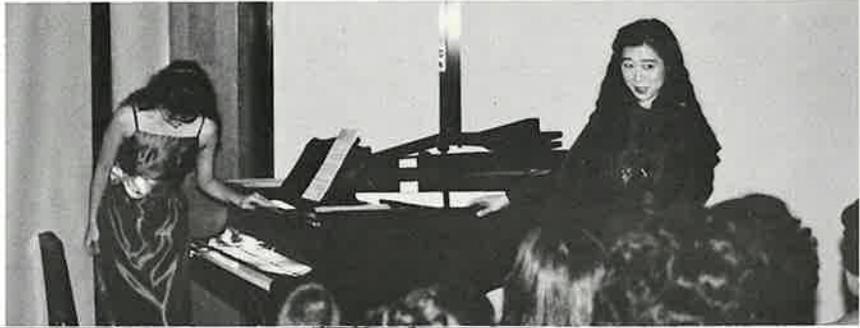
PM 6:00

記念館会議室



藤岡さんの話 「牧水の生き生きとした姿が眼の前に現われて来て、肉声が聞こえてくるような歌は何かと言え、やはり酒の歌ではないかと思うんです。『幾山河越えさりゆかば寂しさのほてなむ国ぞけふも旅ゆく』というのがありますね、あれは寂寥感ですね。行けども尽きない寂しさをみつめているんです。ところが酒の歌になると心が弾んで、牧水という人の面目が躍如として浮かんでくる。『白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしずかに飲むべかりけり』この酒、その醍醐味というのは小さな盃で独り静かに飲む酒だ、それが一番いいんだと言っているんですね。さあどうか皆さんもその眼の前にお酒を飲みながら、今から私が牧水をこの席へ連れてきますから、気楽に聞いて下さい。」

サロンコンサート〈鈴木千香子 エリック・サティを唄う〉



鈴木千香子さん(右)と上原宏子さん



63・3・25(金) P M 6:30

記念館ラウンジ

この夜記念館ラウンジには気のせいかわヨーロッパの風が吹いている感じがあった。室内の大テーブルの上にはワインやビールや名物「牧水」のコップ酒なども見え、山盛りの色とりどりのオードブル類が所狭しと並べられた。人々はそこで思い思いにくつろぎ、友人知己と談笑し、なごやかな空気に浸っていた。この夜サティを唄うのは鈴木千香子さん。国立音大出身でパリではカミーユ・モラーヌ氏にルーセルの歌曲のレッスンを受けており、「アトリエ・デュ・シャーン」の会員である。ピアノ伴奏をする人は、武蔵野音大出身の若手ピアニストの俊鋭で、パリでフランス歌曲の伴奏方法を本格的に学んできた上原宏子さん。まさにこれからの音楽をリードする輝く新しい星たちであり、見事な二十六才のコンビである。

サティは自分を音楽家というよりも、「音響測定家」と考えていたらしい。当時もつとも影響力の強かったワグナーを、仮に「音の最大の浪費家」とするなら、サティは「極端な音の節約人間」という風であった。奇才天才が顔を並べる十九世紀末の音楽家の中でも、殊に異端の風情の強い人である。曲の題名にしてもその通りで、「犬のためのおよぶよした前奏」とか「梨の形をした三つの小品」等、音楽作品の題名としては異様なイメージをもっており、反逆的告発的ともいえるほど、感性にただならぬ気配が見えるのである。

この夜鈴木さんはそういうサティの代表的なプログラムを、丁寧にじっくりと聞かせてくれた。サティの自分で作った詩に「私は生まれ付き禿げなのです、かくして完璧に私は礼儀ただしなのであります」というのがあり、それに曲をつけた初期の歌曲「三つの愛の歌」をはじめ「あなたが欲しい」「エンパイア劇場のプリマドンナ」等、シャンソンも数曲入っていた。その唄い振りも見事であったが歌と歌のあいだに挟む、トークの微妙な面白さは、すっかり聴衆を魅了した。モンマルトルとモンパルナスのそれぞれ特色をもつ街の姿、ドビュッシューとの奇妙な交友関係とか、画家ユトリロの母親との愛の生活の様子など、話題は古き遙かなるパリの裏町をさ迷う如く、人々をしばし陶然と春宵の幻想の世界へいざなったのである。

社団法人 沼津牧水会定款（抜粋）

第一条

この法人は、社団法人沼津牧水会という。

第二条

この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一一 沼津市若山牧水記念館内に置く。

第三条

この法人は、沼津に關わりの深い歌人若山牧水の文学的業績を研究顕彰し、併せて地域文化の振興を図ることを目的とする。

第四条

この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1) 歌人若山牧水に關する調査研究
沼津牧水祭の開催（短歌大会と碑前祭の運営）
講演会の開催

(2) 各種出版物の刊行

(3) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託

(4) その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条

この法人の会員は、次のとおりとする。

(1) 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人
賛助会員 この法人の事業を援助する個人又は法人
名譽会員 この法人に特に功勞のあつた者で、総会の議決をもって推薦された者

第六条

会員にならうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名譽会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。

第七条

この法人の入会金は、次のとおりとする。

(1) 正会員 一〇、〇〇〇円
賛助会員 三〇、〇〇〇円以上

(2) この法人の会費は次のとおりとする。

(1) 正会員 年額 五、〇〇〇円
賛助会員 年額 一〇、〇〇〇円以上

2

〈理事長〉 林 茂樹

〈副理事長〉 大河原二郎 佐藤茂正

〈理事〉 竹沢正夫 大林栄一 杉山光男

佐藤英之助 河本與司幸 浅井治 上田治史

田中和男 寺田桂子 川口和子 青木朝子

〈監事〉 四方一濤 八十濱俊一

後記

諸先生方の原稿を頂き、おかげ様で創刊号を重厚に飾ることができました。ありがとうございます。ごさいました。牧水記念館開館と同時に今号の発行を予定して無理にお願ひ致しましたのに、大変おくれましたことを心からお詫び申し上げます。——春は名のみ風の寒さや——早春賦をハミングしたくなる今日この頃、牧水記念館開館記念イベントも、いよいよ佳境に入り、集う仲間たちの輪も確実に広がっています。やがて、記念館を起点に千本松原の散策、海のほとりのそぞろ歩きなど、風情を楽しむ季節がやってきました。産声をあげたばかりの会報も次号へむけて力強く踏み出したいものです。 青木朝子

まっ赤になつたグラを目の前にして、またもや、わが言語の不備というか、イメージの伝達の困難さといった方がいいのか、痛感した次第でありました。ともあれ、まず歩み出しました。千本の海にも、香貫山にも、狩野川の流れにも、そして、私たちにも春意はすでに兆してあります。 岡本淳子

表紙デザイン 鈴木伸子